

論文の和文要旨

論文題目

内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究
——ホールチとホーリン・ウリゲル、
ホルボー、ウリゲルト・ドー——

氏名

包 金剛

ホールチ及びホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドーは長年にわたって研究されてきた。その間、国内外の学者達によって多くの研究論文が書かれ、ある程度の成果は挙げられたと言える。それらの研究論文はその後の研究、特に筆者の研究にとって極めて重要な価値を持つことは言を待たない。

先行研究をホールチの研究とホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドーの研究とに二分することが出来る。

このうち、先行研究におけるホールチの研究は、ホールチの伝記の記録に過ぎない。ホールチを多角的に研究、評価した論文は未だに書かれていない。

他方、先行研究におけるホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドーの研究は、主にこの三種類の口承文芸を別々にして研究を行ってきた。この三種類の口承文芸を互いに関連付けて研究した論文、またはこの三種類の口承文芸をホールチと関連付けて研究した論文は一編もない。

この三種類の口承文芸を表面的に見れば、これらの間には何らの関係がないように見えるが、実は、このうち、特にホルボーとウリゲルト・ドーはホーリン・ウリゲルの影響を大きく受けながら発生、発展してきたものである。また、ホールチはホーリン・ウリゲルの語り手であるに留まらず、ホルボーの語り手でもあり、ウリゲルト・ドーの歌手でもある。もしも、この三種類の口承文芸を互いに関連付けて研究することなしに、またはこの三種類の口承文芸をホールチと関連付けて研究することなしには、ホールチ及びこの三種類の口承文芸を十分に理解することは不可能であると筆者は考えている。

従って、筆者は本論において「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究——ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドー——」というテーマで研究を行うことにした。しかし、本論では、ホールチとこの三種類の

口承文芸について全面的に研究を行うのではなく、この三種類の口承文芸はなぜ内モンゴル東部地区のみで発生、発展したのか、その文化、社会的背景は何か、この三種類の口承文芸の間にどのような関係があるのか、この三種類の口承文芸の発生、発展にホールチという民間芸人が一体どのような役割を果たしたのか、ホールチとは一体どのような民間芸人であるのか、ホールチとこの三種類の口承文芸が東部地区におけるモンゴル人達の間でどのような地位を占めていたのか、この三種類の口承文芸が東部地区の現代文学にどのような影響を与えたのかなどといった問題について論究し、ホールチとこの三種類の口承文芸の研究を一層高め、ホールチ及びその芸術であるホーリン・ウリゲル、ホルポー、ウリゲルト・ドーのモンゴル文学史に占めるべき位置を指摘することを試みた。

本論は序論、五章と結論から構成されている。

序論では、先行研究を紹介した後、本論を書いた目的、意義及び本論の内容に関わる地域などについて述べた。

第一章では、ホールチの出現するプロセス、社会的地位、活躍の場などについて論じた。

第二章では、ホーリン・ウリゲルの概念、起源、発生した地域と当該地域において発生、発展した要因、英雄叙事詩を凌駕した要因及びその発展史などについて述べた。

第三章では、ホルポーの概念、種類とホルポーの文化的背景及びホルポーとホールチとの関係などについて論じた。

第四章では、ウリゲルト・ドーの概念、ウリゲルト・ドーの社会的背景、文化的背景及びウリゲルト・ドーとホールチとの関係などについて叙述した。

第五章では、この三種類の口承文芸が東部地区の現代文学に与えた影響について論じた。

以上に述べたことに基づき、以下のような結論を出すことが出来る。

一、ホーリン・ウリゲルは18世紀末頃にジョソト盟のトメット旗で発生し、長年にわたって、主に内モンゴル東部地区、つまり、清朝時代のジョソト、ジョー・オダ、ジリム盟の全地域及びホロンバイル盟の一部の地域で伝えられてきたのである。

ホーリン・ウリゲルが内モンゴル東部地区のみで発生、発展した主な原因は以下の通りである。

①東部地区で盛んに語られていた英雄叙事詩の語り方や表現手法などがホーリン・ウリゲルの語り方や表現手法などの構成に寄与した。

②当時、翻訳された漢民族の歴史長編小説はホーリン・ウリゲルの題材になった。

③当時、東部地区のモンゴル人達の定住生活の形態は、ホーリン・ウリゲルの発生、発展にとっては、より絶好の環境を与えてくれた。

④東部地区の人々が昔から英雄叙事詩などの物語を聞くのが非常に好きであったからこそ、彼らにホーリン・ウリゲルが簡単に受け入れられた。

二、ホーリン・ウリゲル及びその語り手のホールチという民間芸人が出現したことに伴い、東部地区でホルボーという口承文芸が発生した。ホルボーの一種のダン・ホルボーは祝詞、讃歌などの口承文芸の影響を受けながらホーリン・ウリゲルの胎内に生まれたものである。もう一種のダブハル・ホルボーはダン・ホルボー、相互詩、結婚式のヘレムル、チョル・ボリヤルドルガなどの口承文芸の影響の下で、ホールチの手を介して出現したものである。

三、民族の抑圧、階級的抑圧、売買婚制度、戦争による迫害、仏教による迫害、モンゴル社会の遅れなどは、ウリゲルト・ドーの社会的背景になり、オヤンギン・ドー、ハリラツァ・ドー、特にホーリン・ウリゲルはウリゲルト・ドーの起源により重要な文化的背景になったのである。

四、当時、この三種類の口承文芸は東部地区のモンゴル人達の精神的生活にとっては不可欠なものであった。この地域のモンゴルの諺に「牛に水を飲ませることをやめても良いが、ウリゲルを聞くことをやめてはいけない」という言葉があるように、近所にホールチがきて、ホーリン・ウリゲルやホルボーを語ったり、ウリゲルト・ドーを歌ったりする時、あるいはラジオによって放送される時、彼らは工作中でも仕事をすぐにやめて、遅れることなくやってきて聞くのである。この三種類の口承文芸は確実に東部地区のモンゴル人達にとって非常に魅力のあるものであった。それ程の魅力があったからこそ、それらの口承文芸はほかの口承文芸に比べてより多くの聴衆を持ち、より発展することが出来たのである。従って、この三種類の口承文芸は当時の東部地区におけるモンゴル口承文芸の三つの頂点であると言える。そして、東部地区の口承文芸における地位の面でも、聴衆の数の面でも、この三種類の口承文芸は、モンゴル口承文芸においては重要な地位を占めるべきであるし、また、モンゴル文学史においてもある程度の地位を占めるべきである。

五、この三種類の口承文芸は内モンゴル東部地区の現代文学に大きな影響を与え、東部地区の独特の特徴を持つ地域的な現代文学作品の出現、即ち、長篇詩、書面ホルボーなどの出現に決定的な役割を果たした。もしも、東部地区に

この三種類の口承文芸がなかったならば、この地域に長篇詩、書面ホルボーなどは生じることがなかった。長篇詩、書面ホルボーなどの出現は、東部地区のモンゴル現代文学を発展させたのみでなく、全モンゴルの現代文学を発展させたと評価すべきである。

六、ホールチはチョールチから生まれた民間芸人である。当時、ホールチ達は人々に「乞食」と言われ、軽蔑されていた貧しい人間であったが、彼らはホーリン・ウリゲル、ホルボーを創造し、また、ウリゲルト・ドーの起源と発展にも重要な役割を果たし、モンゴル口承文芸の発展に偉大な貢献をした。従って、ホールチ達はモンゴル口承文芸史においてはもちろんのこと、また、モンゴル文学史においても重要な地位を占めるべきである。

七、ホールチは多芸多才の民間芸人である。

第一に、ホールチは「ウリゲルチ」である。「ウリゲルチ」という言葉は「語り手」という意味を持っている。ホールチはホーリン・ウリゲルの語り手なので、彼らは「ウリゲルチ」であると言うべきである。

第二に、ホールチは「ホルボーチ」である。「ホルボーチ」という言葉はホルボーの語り手を指している。ホールチはホルボーを上手に語るのも、彼らは「ホルボーチ」であると言うべきである。

第三に、ホールチは「歌手」である。ホールチは民謡をうまく歌うので、彼らは「歌手」であると言うべきである。

第四に、ホールチは演奏家である。ホールチはいつも四弦のホールを弾きながらホーリン・ウリゲルやホルボーを語ったり、民謡を歌ったりする。しかも、彼らは聞き手を感動させる程四弦のホールをうまく弾く才能を持っているので、彼らは「演奏家」であると言うべきである。

第五に、ホールチは「作家」である。ホールチはベンスン・ウリゲルをホーリン・ウリゲルにして語る時に、ベンスン・ウリゲルに書かれたそのものを何らの変更も加えないで語るのではなく、そのベンスン・ウリゲルの主要な内容を変更しない前提の下で推敲し、物語のあらすじを改めて組み立て直して語るものである。また、ホールチは人の作った歌を歌う場合もあれば、自ら歌を作って歌う場合もある。更に、彼らはいつも即興的にホルボーを作って語る。従って、ホールチは「作家」であると言うべきである。

以上に基づき、ホールチとは「ウリゲルチ」、「ホルボーチ」、「歌手」、「演奏家」、「作家」であると評価することが出来る。